きょうだい関係が孤独感や自尊感情に及ぼす影響について

近藤　綾香
（久保　克彦ゼミ）

問　　題

１．きょうだい関係と性格形成について

私たちは生活の中で学校や職場など様々な場所で様々な人間関係を築いている。誕生して初めて経験する関係は，親子関係である。そして次に経験するのは，きょうだい関係である。親子関係の基本は，保護と教育に基づいた「タテ」の関係である（岡崎・杉井，2004)。しかし，きょうだいという関係は友達関係でもなく，年齢差があっても先輩・後輩という関係でもない。時には上下関係を意識した兄・姉・妹・弟といった「タテ」の関係になる反面，年齢を意識せず遊び・喧嘩をする「ヨコ」の関係にもなる。きょうだいという関係は特殊なものように思える。依田（1990）はこうした異質な２つの関係を持ち合わせたきょうだい関係を「ナナメ」の関係と呼んだ。同じ親から生まれ，同じ家庭環境の中で育てられたきょうだいでも，出生順位によってそれぞれ特徴的な人格を形成しやすく，人格や行動に違いが生じやすいことは，古くから指摘され一般的に信じられてきた。また，優生学的な立場から出生順位と子どもの心身の発達との関係を見ようとした研究は，19世紀の後半から活発に行われ膨大な数にのぼっている。さらに，同じ両親から生まれ同じ家庭環境で育ったにも関わらず，出生順位によってきょうだいの性格や人格に特徴があることが，Levy (1936) を始め多くの心理学者によって報告されている。

白差（2004）は出生順位は家族集団内での地位や役割を規定し，家庭における社会的地位の差をもたらし，それが子どもの人格形成に大きな影響を及ぼすことを示唆している。何番目に生まれてきたかによって，親の子育ての経験や養育態度に差があると考えられる。例えば，長子は人生の最初には両親の愛情と関心を独り占めできるが，下の子の誕生によって，その特権的な地位が奪われることから，劣等感を抱きやすいと指摘されている。これに対して末っ子は，親が最後の子どもであることが分かっているので，気ままに甘やかすため，依存的になりやすいことが報告されている。

家庭における子どもの地位や親の役割期待が異なることが，人格や行動の差異をもたらし，社会性の発達に影響を与えると考えられる。特に日本では，長幼の序や上下を区別する文化がきょうだい関係にも反映しており，兄や姉に対してより多くの望ましい特性を期待する傾向がある。古くから言われている「総領の甚六」「次男のきかん坊」「末っ子の甘えん坊」といった言葉は，出生順位との間に関係があることを意味する。出生順位そのものや出生順位による家庭内での位置関係が直接的に人格形成に影響するのではなく，それに関した親の育児経験や育児態度，子どもへの役割期待などの違いが大きく影響してくるのである。また，性別によって子どもへの役割期待が異なる。持って生まれた性により「名づけ（命名)」から始まり，親は子どもの性によってかかわり方や遊びや活動の導きを変える。これは前の世代が持つ因習的な考え，そこから生まれる子どもへの期待が，親の子どもへの想いを作る側面が強調されている。そして，日本では家父長制度が現代社会にも存在し，女性よりも男性が富と権力という社会的な成功を遂げるように期待する伝統的な考え方は残っている。例えば，男の子の場合，競争的な自己主張や達成するためのエネルギー源として，活発さや冒険心だけではなく多少の乱暴さやいたずらが許容されるが，女の子がこのように元気で活発だと「お転婆」と良くない印象を与えてしまう。また，男の子よりも女の子に下の子の面倒や家事の手伝いをすることに期待をするのは，一般的な考え方である。

さらに，人格差・行動差は，２つの要因が複雑

に絡み合って形成される。第１は出生順位による育成環境の相違である。親は長子を育てるときと，末っ子を育てるときとでは条件が異なる。長子を育てるときは母親にとって，すべてが初めての経験であるので慎重な神経質な育児態度をもちやすい。しかし，中間子・次子を育てるに至っては，親は今までの経験を生かして，より良い条件の下で育てることができる。第２は生活している社会のきょうだいに関する文化である。わが国には，家父長制的家族制度に根差した独特の文化がある。長男が次男，三男よりも重要視されるのである。親の長男に対する期待と，次男・三男に対する期待は同じものではない。この２つの要因が複雑に絡み合って，きょうだいでの人格差が生ずると考えられる。

ただし，出生順位の問題は，きょうだい関係と心身の成長・発達（特に，社会性や性格の形成）との関係において，早くから注目され研究されてきた。しかし，いまだに結論をみるに至っていないが，Levy（1936）を始め多くの研究において出生順位別の性格特性の存在が検討されてきた。

２．出生順位別の性格特徴

出生順位別の性格特徴は，白差（2004）に従って以下のようにまとめられる。今回の研究で対象にする出生順位は，長子・中間子・末っ子・一人っ子の４つのカテゴリーである。

まず長子とは，複数のきょうだいの中で最初に生まれた子・上にきょうだいがいない子と定義できる。最初の子どもとして，両親をはじめ周囲の人々の期待と祝福を一身に集めてこの世に生まれてくる。しばらくの間，ひとりっ子として成長するので，下の子が生まれるまでは家中の王座に君臨し「小さな王様」として家庭の中で中心的な存在として大切にされる。下の子が生まれると，親を独占できないことに気づき，「自分は兄・姉である」という意識が育ってくると，下の子を許すようになり，養護する気持ちになる。自分を押さえて下のきょうだいに対し，兄・姉の役割を果たそうとするようになり，素直・控え目・慎重など落ち着きのある人格を形成する。他のきょうだいよりも不安定であり，特に不安な状況になると他人に依存しやすい。このことから長子は，他の子どもと比較して，他人に同調しやすい傾向を持っているといえる。このような状況から，長子的性格傾向といわれる特性を形成しがちであり，「総領の甚六」の特質につながる。(付表１)

中間子とは，複数のきょうだいの中で長子と末っ子の間に生まれた子，上と下にきょうだいをもつ子と定義できる。生まれたときに年上のきょうだいが存在している点では末っ子と共通し，何年か経つと年下のきょうだいの出現を経験するという点では長子と共通している。きょうだい関係に関する体験を量・質ともに豊富にもっていることで，ひとりっ子と最も対照的である。長子は過去に愛情を独り占めした経験があり，末っ子は現在満たされているのと比べ，常に愛情の不安・不満につきまとわれている。そのため，ひがんだり，ひねくれやすくなる。両親の愛情が十分に注がれないことから，粗暴で排他的な行動を形成しがちで，問題行動を起こしやすい。長子と末っ子に挟まれる中間子は，両親から無視される傾向のある中で，上下のきょうだいからの圧力に対抗しなければならない。これに伴い，中間子には２つのタイプがある。１つは長子・末っ子・ひとりっ子に比べて影の薄い，引っ込み思案な，感情表現の乏しい子どもになる。もう１つのタイプは家庭内の安住の地が求められず，家庭外の世界にはけ口を求める子どもになる。２番目以下の子は着るものやおもちゃなど，長子のお古を与えられがちになる。新しいものが欲しいという願望はなかなか満たされない。また，末っ子におもちゃなどを横取りされても「お兄（姉）ちゃんなんだから」と我慢を強いられるので，欲求不満は高まる。この欲求不満のはけ口として，反抗的な態度や乱暴な行動に走りやすくなる。きょうだい数が多い場合などは，親の関心がうすく，親から無視・放任されていると感ずるものもいる。そのため，子どもは必要以上に自己を表現しようとするか，反対に自己表現を押さえるようになるかのどちらかの特色をもたらざるをえない。(付表２)

末っ子とは，きょうだいの中で最後に生まれた子，下にきょうだいがいない子と定義できる。生まれたときに年上のきょうだいが存在している点では中間子と共通し，年下のきょうだいの経験がないという点ではひとりっ子と共通している。長

子とは対照的な位置にある。末っ子は他の子どもよりも多く親から甘やかされることから，甘えん坊であり，一般的に人格面の弱さが指摘されている。親は誕生時の愛情や保護をいつまでも保ち続け，赤ん坊扱い・幼児扱いをする期間が長くなりがちである。親ばかりでなく，兄や姉の態度も同様であり，依存的で甘ったれな性格を末っ子に備えさせてしまう。大人に手をかけられるという点では，長子の場合とほとんど変わらないが，下にきょうだいができることがないので，この甘やかしの環境はいつまでも続くのである。常に家族の最年少者として注目・関心を集め，決して王座の地位を奪われることはない。(付表３)

ひとりっ子とは，自分以外にきょうだいがいない子と定義できる。きょうだいに関する研究の発端はひとりっ子の問題であり，Hall（1907）は「ひとりっ子であることは，それだけで1つの病気である」と述べた。大げさのように思うが，ひとりっ子はきょうだい研究の中でそれだけ重要視されている。親子の接触時間は長く，親はかげがえのない子として１人の子どもに愛情・注目を集中するため，どうしても過保護・過干渉・溺愛になりやすい。その結果，自己中心的で，神経質で依頼心が強くなりがちである。また，過程の中で子ども同士の関係を持てないので，競争や協力・妥協や忍耐といった社会的技能を身につけることが難しい。(付表４)

また，近年の精神分析学的研究でも，きょうだい関係が親の愛情をめぐって，本質的に競争的・葛藤的なものであるとする考え方は，基本的に変わることなく今日まで続いている。親の愛情に対しての受け取り方の違いによって，子どもの生きる力と考えられ，自己の能力や価値についての評価的な感情である自尊感情（岡崎・杉井，2004）と青年期における基本的な生活感情と言われている孤独感（落合，1985）に違いが生じると考える。白差（2004）は出生順位による性格特徴・傾向の違いに最も影響しているのは，親の養育態度であると述べている。自尊感情と孤独感は親の養育態度と関係していると様々な研究で示唆されている。

３．自尊感情と親の養育態度との関連について

自尊感情とは，自己に対する評価感情であり，自分自身を基本的に価値あるものとする感覚および感情である。また，「人が自分自身についてどのように感じているかという感じ方のことであり，自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことである（山本・松井・山城，2001)」。自分自身の存在や生を基本的に価値のあるものとして評価し，信頼することによって，人は積極的に意欲的に経験を積み重ね，満足感をもち，自己に対して他者に対しても受容的でありうるのである。このような意味において，自尊感情は精神的健康や適応の基盤をなす。James（1980）によれば，自尊感情＝成功/願望という公式で表されるが，これは個人が願望を持っている領域で成功したと思えることが，自分に対する満足を高めることを示している。自尊感情の高さは，親の暖かさで無条件に受容する養育態度と強い関連がある。

親から愛されている実感のある者はそうでない者に比べて，自尊感情が高いことが，多田・蛎崎・石井（2007）の研究で明らかにされている。また，三井（1999）は家庭において十分に尊重され，自分自身がかけがえのない生命であるという認識をもつことは，その後の人生において自己の存在意義を確かにするための最も重要な要素であると述べ，親からの愛情と子どもの自尊感情との関連を示唆している。このように自尊感情の高さは，親から愛されている実感が重要である。稲葉・戸田（1999）は自尊感情を高めることに必要な対応として，母親が子どもの言語的なコミュニケーションを大切にし，さらに子どもの気持ちを尊重し受容すること，同情的であると述べている。

４．孤独感と親の養育態度との関連について

孤独感とは，人間関係の中で我々がこうありたいという願望があるとき，その願望が十分に満たされなかったり，逆に心理的な満足感を低下させるような結果が生じたときに感ずる感情の1つである。言い換えると，願望レベルと達成レベルの間にギャップが生じたときに生じる感情である。そして，個人の社会的関係の欠如に起因し，主観的な体験であり，その体験は不快で苦痛を伴う。これらはPeplau &Perlman（1979）が定義したものである。孤独感尺度には１次元尺度と多次元尺度があるが，代表的で最も多く利用されているの

は，今回の調査でも使用するRussell, Peplau&Perlman（1980）らが作成した1次元尺度の改訂版UCLA孤独感尺度である。孤独感は個人にとって苦痛でときには問題行動に駆り立てる感情であり，落合（1985）の研究によって無気力感と空虚感は孤独感に最も近い類縁関係にある感情であると示唆されている。また堤（1994）の研究では，むなしさの中核に孤独感があることが明らかにされている。孤独感を解消することは円滑な人間関係を育む上で重要である。また，無力な希望のなさ，言いようのない空虚さによって特徴づけられる。金子（1998）の研究では孤独感は生育歴の中で幸福であったという印象，母親からの心理的サポートに関わることが明らかにされている。家庭で親に暖かく受けとめられ自分に実感を持つことで孤独感という虚無感からの救いになることが示唆されている。

目　的

出生順位によって性格特徴が異なるのは親の養育態度の違いであり，自尊感情と孤独感は親の養育態度と関連をもつことが過去の様々な研究から考えられる。そこで，本研究では出生順位の影響によって自尊感情と孤独感に違いが生じるかを調べる。親の養育態度が各出生順位で異なっていると仮定し，そのことによって各出生順位の子どもが受け取る親の愛情に対しての満足度が異なり，出生順位間に差が生まれると考えられる。親の愛情を独占出来る期間が長いきょうだいの自尊感情・孤独感と，独り占めした経験のあるきょうだいの自尊感情・孤独感，短い間しか独占出来なかったきょうだいの自尊感情・孤独感に違いがあると考えられる。そして自尊感情が最も高いのは，親の愛を独り占めし続けることができる一人っ子，次に高いのは親の愛情を長い期間注がれる末っ子，そして下の子が生まれるまでは一人っ子と同じように育てられる長子が３番目に高く，上にも下もきょうだいがおり親の愛を独り占めにしたことがない中間子が最も低いと仮説を立てることが出来る。また孤独感は自尊感情と反対の性質をもつ感情と考えられているので，結果も反対になると思われる。孤独感が最も高いのは中間子であり，長子・末っ子の順に高く，一人っ子は最も低いと仮説を立てる。

性別によって子どもへの役割期待が異なり，親の養育態度に違いが生じると考えられる。そのことによって子どもは親の愛情を不平等に感じると示唆されている。本研究では，同じ出生順位でも自尊感情と孤独感に性差があるのかを調べる。子どもが感じる不平等によって，自尊感情と孤独感に性差が生まれると仮説を立てる。

自分自身を大切に思える，子どもの生きる力と考えられている自尊感情はプラスの感情である。孤独感は願望が十分に満たされなかったり，心理的な満足を低下させる時に生じる感情であり，マイナスの感情である。この２つの感情は正反対の性質を持つので一方が高ければ，もう一方が低くなると思われる。工藤・西川（1983）の研究で自尊感情と孤独感との間には中程度の負の相関があると示唆されている。よって今回の研究でも自尊感情と孤独感の間に負の相関が見られると仮説を立てる。

以下に本研究における仮説を列記する。

仮説１）自尊感情は一人っ子・末っ子・長子・中間子の順に高く，孤独感は中間子・長子・末っ子・一人っ子の順に高い。

仮説２）出生順位間で自尊感情と孤独感に違いが生じる。

仮説３）性別によって同じ出生順位でも自尊感情と孤独感に違いが生じる。

仮説４）自尊感情と孤独感に負の相関が見られる。

方　法

調査の方法

質問紙法を用いて，大学生を対象に意識調査を行う。フェイスシートでは何人きょうだいかと出生順位について問う質問を行う。対象とする出生順位は長子・次子・中間子・末っ子・ひとりっ子とする。１番最初に生まれたきょうだいを長子，３人きょうだい以上の長子と末っ子以外を中間子，最後に生まれたきょうだいを末っ子とする。

自尊感情は，Rosenberg（1965）が作成し，山本・松井・山成（1982）が邦訳した「自尊感情尺度」を用いて測定する。質問は10項目であり，「あてはまらない」(１点)「ややあてはまらない」(２点)「どちらともいえない」(３点)「ややあて

はまる」(４点)「あてはまる」(５点) の５段階評定である。質問項目数が10項目と少ないにも関わらず，内容的妥当性は高いと考えられ，項目数が少ない分実施も容易である。また，尺度の１次元性は保証されている。

孤独感については，「改訂版UCLA孤独感尺度」を用いて測定する。この尺度はRussell,at al. (1980) によって作成され，工藤・西川 (1980) が邦訳したものである。質問は20項目であり，「決して感じない」(１点)「めったに感じない」(２点)「時々感じる」(３点) [「しばしば感じる」(４点) の４段階評定である。

研究対象

研究調査は京都学園大学に在籍する145名の大学生を対象に行った。合計145名であった。分析に際して記入漏れがあった７名と今回の研究の対象外であった双生児１名を除外したため，有効回答数は137名であった。(表１)

表１　アンケート回答者の内訳

性別	長子	中間子	末っ子	一人っ子	総計
男性	24	12	26	8	70
女性	17	11	29	10	67
総計	41	23	57	18	137

調査時期・形式

2009年10月から11月にかけて授業内に質問紙を配布，実施した。また個別に依頼して配布，実施した。質問紙については無記名で記入させた。

結果の処理

自尊感情尺度の回答は５段階評定で求め，各項目への回答に対して１～５点を「あてはまらない (１点)」～「あてはまる (５点)」のように各項目に与えた。ただし逆転項目である項目３・項目５・項目８・項目９・項目10は評定を逆転させ，「あてはまらない (５点)」～「あてはまる (１点)」とした。

孤独感尺度の回答は４段階評定で求め，各回答に対して１～４点を「決して感じない (１点)」～「しばしば感じる (４点)」のように各項目に与えた。自尊感情尺度と同様に，逆転項目である項目１・項目４・項目５・項目６・項目９・項目10・項目15・項目16・項目19・項目20を逆転させ，「決して感じない (４点)」～「しばしば感じる (１点)」とした。

各出生順位別に自尊感情尺度得点と孤独感尺度得点を計算し，各出生順位に平均を求め，出生順位間で比較した。また，同じ出生順位ごとに性差があるのかを分析した。

結　　果

⑴　出生順位間の差

各出生順位で全体と男女別に自尊感情尺度の平均得点を求め，図１および２を作成した。全体の平均得点を図１，男女別の平均得点を図２に示した。また，各出生順位で全体と男女別に孤独感尺度の平均得点を求め，図３および４を作成した。全体の平均を図３，男女別の平均得点を図４に示した。

全体の自尊感情尺度の得点では，出生順位間にほとんど統計的な有意な差はなかったが，男女別に見ると得点に有意な差が認められた。男性の自尊感情尺度の得点は長子と中間子がほぼ同じ得点であり，一人っ子・末っ子・長子と中間子の順に得点が高かった。女性の自尊感情尺度の得点は長子・中間子・末っ子・一人っ子の順に高かった。

孤独感尺度の得点では，長子と末っ子がほぼ同じ得点であり，中間子・長子と末っ子・一人っ子の順に高かった。男性の孤独感尺度の得点は，仮

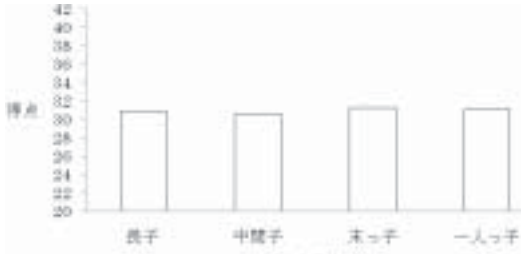

図1　全体の自尊感情尺度の平均得点

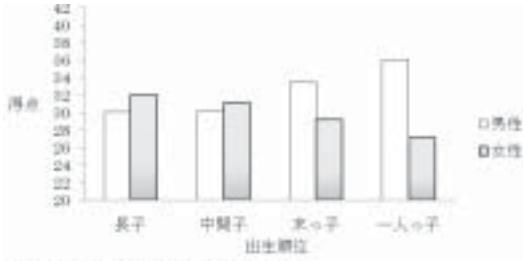

図2　男女別の自尊感情尺度の平均得点

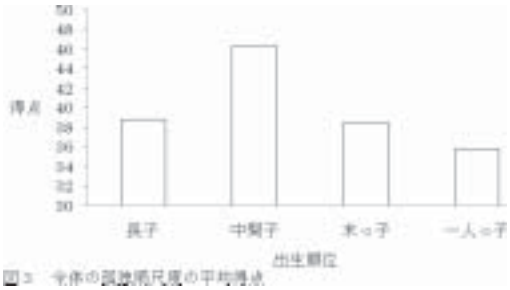

図3　全体の孤独感尺度の平均得点

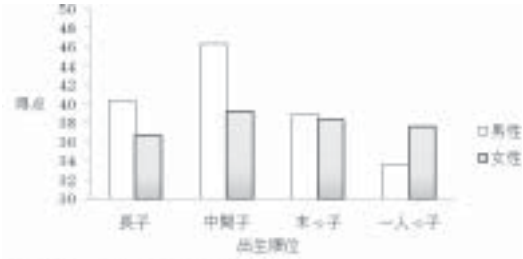

図4　男女別の孤独感尺度の平均得点

説の１通り中間子・長子・末っ子・一人っ子の順に高い結果になった。女性の孤独感尺度の得点は中間子・末っ子・一人っ子・長子の順に高かった。したがって，仮説１は部分的に支持された。

⑵　分散分析の結果

自尊感情尺度得点において，出生順位間の平均を比較するために分散分析を行ったが，出生順位間に有意な差が認められなかった（F (3,136)＝0.036, *ns*)。性別によって差が生じるかを調べるため，男女別に出生順位間の平均を比較するために分散分析を行ったが，両方とも有意な差が認められなかった（男性F (3,69)＝1.496,*ns*，女性F (3,66)＝1.255,*ns*)。

また，孤独感尺度得点において，出生順位間の差を比較するために分散分析を行ったが，出生順位間に有意な差が認められなかった（F (4,136)＝1.269,*ns*)。男女別に出生順位間の平均を比較するために，分散分析を行い性差を調べた。結果は自尊感情尺度と同様に男性・女性ともに有意な差が認められなかった（男性F (4,69)＝1.764,*ns*，女性F (4,66)＝0.446,*ns*)。したがって，出生順位によって自尊感情と孤独感は影響されないことが考えられる。しかし，男性の出生順位間で有意な傾向が認められたので，男性のきょうだい関係は孤独感に影響を与える傾向があると言える。そこで男性の出生順位間で多重比較を行った。その結果，有意な差は認められなかったが，中間子と一人っ子間に有意な傾向が認められた。孤独感について，中間子と一人っ子の間に違いがある傾向が考えられる。仮説２は一部のみ支持された。

⑶　男女差の t 検定の結果

自尊感情尺度得点において，男女差を比較するため，出生順位ごとに t 検定を行った。その結果，末っ子と一人っ子に男女間の自尊感情尺度得点に統計的に有意な差が認められた（一人っ子t (16)＝4.001,p ＜.05，末っ子 t (67)＝－2.15,p ＜.05)。末っ子と一人っ子以外の出生順位に男女差は認められなかった（長子 t (39)＝－0.67,*ns*，中間子 t (21)＝－0.251,*ns*)。末っ子と一人っ子の自尊感情は性別によって違いが生じると考えられる。

また孤独感尺度得点においても，男女差を比較するため，出生順位ごとに t 検定を行った。その結果，すべての出生順位に男女間の有意な差が認められなかった（長子 t (39)＝0.833,*ns*，中間子 t (21)＝1.806,*ns*，末っ子 t (63)＝0.328,*ns*，一人っ子 t (16)＝－0.97,*ns*）が，中間子の男性間にのみ有意な傾向（.085）が認められた。したがって中間子のみ男女間で孤独感の違いがある傾向と考えられる。仮説３は部分的に支持された。

⑷　自尊感情と孤独感の関連

まず，自尊感情と孤独感の関連を示すために全体の出生順位別，男性の出生順位別，女性の出生順位別を散布図を図７に示した。

次に，自尊感情得点と孤独感得点との相関関係を分析したところ，有意な相関はみられなかった（r ＝－.656,*ns*)。さらに性別ごとに相関関係を分析したところ，ともに有意相関はみられなかった（男性 r ＝.439,*ns* 女性 r ＝－.269,*ns*)。散布図をみると，女性の値で１つ大きく外れている値がある。その値を外して再び女性の相関関係を分析し

表２　男性の孤独感尺度得点の分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	1093.838	3	364.613	2.373	†.078
グループ内	10140.962	66	153.651		
合計	11234.800	69			

†P＜.10

表３　男性の孤独感尺度得点の多重比較

(I) 出生順位	(J) 出生順位	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
長子	中間子	-7.16667	4.38251	.366	-18.7177	4.3844
	末っ子	1.20513	3.50881	.986	-8.0431	10.4534
	一人っ子	7.41667	5.06048	.464	-5.9213	20.7547
中間子	長子	7.16667	4.38251	.366	-4.3844	18.7177
	末っ子	8.37179	4.32596	.223	-3.0302	19.7738
	一人っ子	14.58333	5.65779	†.058	-.3290	29.4957
末っ子	長子	-1.20513	3.50881	.986	-10.4534	8.0431
	中間子	-8.37179	4.32596	.223	-19.7738	3.0302
	一人っ子	6.21154	5.01159	.604	-6.9976	19.4207
一人っ子	長子	-7.41667	5.06048	.464	-20.7547	5.9213
	中間子	-14.58333	5.65779	†.058	-29.4957	.3290
	末っ子	-6.21154	5.01159	.604	-19.4207	6.9976

† $P<.10$

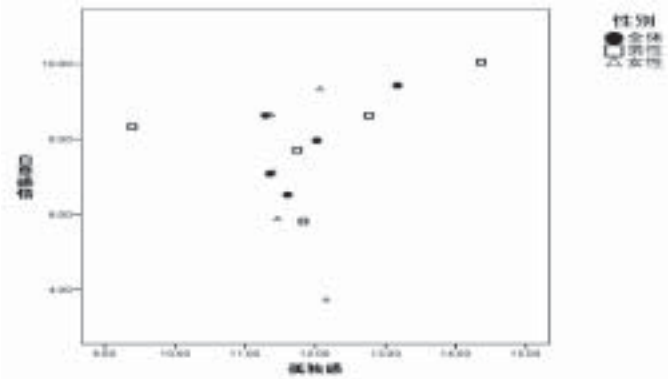

図７　自尊感情尺度得点と孤独感尺度得点の散布図

たが，有意な相関関係はみられなかった（$r=.609$, *ns*）。この結果から自尊感情と孤独感に関連がないことが考えられるので，仮説４は支持されなかった。

考　　察

⑴　きょうだい関係が与える影響について

本研究では，きょうだい関係は孤独感に影響を及ぼすという結果が部分的に得られ，中間子と一人っ子に違いが生じた。中間子と一人っ子の親の養育態度やきょうだい環境は正反対である。中間子は上にも下にもきょうだいがおり，親の愛情を１度も独り占めしたことがない。常に愛情の不満・不安がある中間子と対照的に一人っ子は，自分以外にきょうだいがいないので，親の愛情を自分だけのものに出来る。中間子と一人っ子に対しては親の養育態度が明らかに異なることが考えられ，親の養育態度の違いによって子どもが感じる親からの愛情の満足度も異なると考えられる。だが，中間子と一人っ子以外の出生順位間で孤独感に違いは生じなかった。また，自尊感情においては全ての出生順位間で統計的に有意な結果を得ることが出来なかった。これは自尊感情と孤独感はきょうだい関係によって影響されないということが示唆される。この結果から，親の養育態度は出生順位によって変わらないと考えられる。過去の様々な研究によって，きょうだいの出生順位によって人格特徴が異なることは明らかになっており，最も大きい要因は親の養育態度と考えられてきた。しかし松原・平松（2004）の研究によって，きょうだいの数による親の養育態度の差は，これまで言われていたほど大きな差がないことが示唆されており，子どもの性格特性

と親の養育態度との関連性やきょうだい数との関連性は低いという結果が得られている。

この結果から考えられる要因のひとつは，家庭環境の変化である。「現代では，小学校入学以前に，ほとんどの子どもたちが，幼稚園や保育所といった場所で，同年齢の子どもたちとの間での遊びを経験していることがきょうだいの影響を小さくしている（本郷，1997)」。早い時期から家族以外の人と関わり，関係を築くことによって家族以外から受ける影響も大きくなる。松原・平松(2004）の研究では，現代社会できょうだいがいて一人部屋を持つ子どもは69%，習いごとを１つ以上通う子どもは96%というデータが得られている。一人部屋を持つことや，習いごとを習うことは少なからず遊び時間や家族団欒の時間の減少に影響を与えている可能性が予想される。一緒に過ごす時間が少なくなることで，家族から受ける影響は少なくなると考えられる。

また，人間関係の変化もその要因のひとつである。本郷（1997）は「きょうだい関係が相手の心に踏み込まず，お互いのテリトリーを侵さない表面的な付き合いに変化してきた」と述べている。そしてきょうだい関係だけではなく，友人関係など様々な人間関係で関係の希薄化が指摘されている。千石（1985）は，現代の若者には従来にはなかった新しい人間関係が生まれているのではないのかと指摘しており，そして「やさしい」が「打ち解けない」という異なった傾向の心理特性が若者の心に芽生えていると分析している。また，他者との関係を維持しつつも決して自らの内面を表に出そうとしない人たちの心を外に開くことを拒否している状態を心理的ひきこもりと指摘しており，積極的な対人的関わりを避けあたりさわりなく付き合い，自分の弱みも見せないような関わり方を対人退却としている。松原・平松（2004）の研究結果でも，現代の子どもに「対立」や「専制」の関係よりも「調和」を重んじる傾向がみられ，きょうだいケンカをする機会が少なくなっていることが示唆されている。現代の子どもの性格特性として，心はやさしいが，互いに傷つくことを恐れる傾向が生じつつあるのかもしれない。ケンカをして，言いたいことを言うことでお互いのことが分かり，認め合える関係になる。このような関係であれば，お互いに刺激し合い成長していく。しかし，傷つくことを恐れ，言いたいことを言わない関係では距離が出来るだけである。表面上だけの関係では，良い影響も悪い影響もなくなってしまうように思われる。

次に，岡崎・杉井（2004）の研究によって，きょうだいと信頼し受容し合う関係や対等な関係を築いていれば自尊感情が高いことや，きょうだいとの調和的な関係によって自尊感情を高低に影響を与えていることが明らかにされている。きょうだいの出生順位によって自尊感情に影響を与えなかった要因は，きょうだい関係が干渉し過ぎない，傷つけ合わない調和的な関係へと変化していることだと言える。

また，出生順位間で孤独感に違いが生じなかった要因も人間関係の希薄化だと考えられる。堤(1994）は「日本人の自我成立には，他者の存在がより強く関わってきているという文化的背景が関与している」と述べている。さらに，堤（1994)はわれわれの抱くむなしさには，関係性の欠如ないし挫折感としてのさびしさの影が色濃く反映していることを示唆している。このむなしさの感情の中核には孤独感が存在することが明らかにされている。本研究で出生順位間に違いが生じなかったのは，出生順位に関わらず，現代の人間関係が表面だけの浅い関係であることが原因であると思われる。

このようにきょうだい関係や親の養育態度が子どもの性格形成に与える影響は以前よりも少なくなっていると考えられる。きょうだい関係の研究は，親の愛情をめぐって，本質的に競争的・葛藤的なものであるとする考え方であるが，現代の人間関係にはあてはまらないのかもしれない。きょうだい関係が人格に及ぼす影響が小さい要因には，過去と現代の人間関係の変化が大きく関わっていると考えられる。岡崎・杉井（2004）は，少子化と個人化と私事化が浸透しつつある今日のおいては，今後一層きょうだいとの関係が単純になり，希薄化になっていくと推測している。時代とともに人間関係も変化をしている。この変化は良い部分も悪い部分も含んでいる。人が影響を受けるものや人間関係は，必ずしも良いものだけではないが，人と関わることで成長出来るのは確かなこと

である。成長をする中で苦しいことや辛いこと，時には傷ついてしまうこともあるが向き合い乗り越えることで人は成長していく。しかし，現代の人間関係は家族の中でも最初から辛いことや苦しいこと傷つくことを恐れて関わらなくなってきているのである。

⑵ 性差について

本研究では，自尊感情において末っ子と一人っ子に性差が認められた。末っ子は長子や中間子よりも長い期間，親の愛情を独占することが出来る。また，一人っ子は親の愛情を独り占めし続けられる。他の出生順位と比べ，長く愛情を独占できる末っ子と一人っ子に性差が生じたことは，親の養育態度は性別によって違うことが考えられる。そして，性別によって違う親の養育態度の影響は，親の愛情を長く注がれるほど大きくなると解釈できる。

また，岡崎・杉井（2004）の研究では，調和的なきょうだい関係を形成している者の方が社会的スキルや自尊感情が高いという結果が得られている。そして女性においてはきょうだい関係が分離的でない者ほど社会的スキルや自尊感情が高いことが明らかにされている（岡崎・杉井，2004）。現代のきょうだい関係は，希薄化しつつある。特に女性の人間関係は，他者の目を気にして他者との調和も大切にしており，行動上では優等生であるが，同調行動をとっていても心理的には友人と離れていて，ただ集団から外れまいと群れ志向であると推察している（上野，1994）。堤（1994）の研究では女性の方が男性より一貫して自己否定感に基づく空虚感が高いことが明らかにされている。他にも梶田（1980）の研究結果では，女性の方が自己に否定的であるとされている。また上野（1994）は女性の方が家庭適応が高いことを指摘している。女性は男性よりも自分を傷つけないように，相手が踏み込まないような表面的な関係を築いていると言える。岡崎・杉井（2004）の研究では，女性はきょうだいと交流そのものが社会的スキルや自尊感情を高める効果を持つという結果を得ている。このような諸研究から男性よりも女性の方が自尊感情が低い結果になったのは，きょうだい関係の希薄化が影響していると考えられる。

次に，本研究では孤独感において中間子に性差があるという傾向が認められた。中間子は親からの愛情不足が指摘されているが，金子（1998）の研究では性別によって孤独感に影響を及ぼす要因が違うことが示唆されている。男性は自己開示が特に重要であり，その他にも自己信頼・受容性・対立とも関連がみられ，アサーティブでないことが孤独感を高めているとされている。また，金子（1998）は親密な人間関係を体験することで孤独感は薄らぐと考えられると述べている。男性の孤独感が女性よりも高い傾向があることは，現代の人間関係は希薄化が要因であると考えられる。男性の孤独感は，親密な人間関係を形成する土台となるアサーティブが影響するが，女性の場合は母親からの受容されていないことが孤独感を高めることになる。このことから，女性は母親に受容されていると感じていると言える。

⑶ 自尊感情と孤独感の関連

自分で自分を肯定的に思える自尊感情が高ければ，否定的な感情である孤独感が低いと思われるが，本研究において自尊感情と孤独感に負の相関が見られなかった。このことも前途のような，人間関係の希薄化が影響していると考えられている。表面的な友人関係が社会的不適応状態に与える影響は大きく，このような社会的不適応状態においては自尊感情の低下が見られることが多い。また山本（2004）は，友人関係で気遣いが高いと他者評価が低くなり，他者評価が低いことは，他者との比較や他者の評価によって影響を受けることもなくなり，自らを省みることが少なくなると考えている。他者との関わりが浅くなることで自分自身を評価することが少なくなっているので，全体的に自尊感情が低いと考えられる。

そして今回の研究の対象である大学生は，堤（1994）の研究で中学生・高校生に比べむなしさの経験的水準が低下することが明らかにされている。堤（1994）は価値観が確立され，自我が統合され安定化していくことの現れとして，あるいは外在的価値観の受容ないしは彼らなりの諦観の帰結として低下していると示唆している。

このような人間関係の希薄化の影響によって，本研究で自尊感情と孤独感に負の相関がみられな

かったと考えられる。両極端である自尊感情と孤独感は人間関係の希薄化によって低くなっているのである。

まとめと今後の課題

本研究では，きょうだい関係が及ぼす自尊感情と孤独感の影響について検討した。きょうだいに関する様々な先行研究で，出生順位ごとに異なった人格特徴をもつことが明らかにされており，その要因として親の養育態度やきょうだいの数，きょうだい環境が明らかにされている。本研究では出生順位によって違う傾向はいくつかあったが，明確な違いはなかった。性差については中間子と一人っ子に違いが生じただけであった。この結果は，これまで行われてきた先行研究と比べ，きょうだい関係が及ぼす影響が少ない。この要因として考えられるのは，人間関係の希薄化である。きょうだい関係や家族関係の希薄化によって，影響が減少したと考えられる。また，本研究では自尊感情と孤独感に負の相関があるかを検討したが，先行研究と異なり負の相関はなかった。この結果の要因としても人間関係の希薄化が考えられる。人間関係の希薄化によって，全体的に自尊感情と孤独感が低下していると推測できる。

しかし，きょうだい関係が及ぼす影響の減少の要因が人間関係の希薄化であることは今回の研究では明らかにされていない。本研究で出生順位による違いが生じなかったのはデータ数が少なく，各出生順位のデータ数がまばらだったことも要因のひとつの可能性がある。それゆえに，今後のきょうだい関係の影響についての研究ではデータ数を増やし，データ数が各出生順位に均等である必要がある。そして，きょうだい関係の影響を調べることに加え人間関係について検討する必要がある。きょうだい関係の影響の大きさは人間関係と関連があるのかを明確にするのが今後の課題である。また，藤本（2009）はメンタルヘルスの観点からきょうだい関係は重要だと指摘している。今後，メンタルヘルスを分析する上できょうだい関係は重要になってくると予想される。様々な観点からのきょうだい関係についての研究が必要となってくると思われる。

引用文献・参考文献

白差俊憲（2004）：きょうだい関係とその関連領域の文献集成 Ⅱ．論述紹介編　(有)川島書店

多田玲子，蛎崎奈津子，石井トク（2007）：親との関係と自尊感情，自己肯定感との関連　日本看護学会論文集　母性看護　日本看護協会出版会，38 pp.53～55

三井善止（1999）：生と性の教育学　玉川大学出版，pp.145

白佐俊憲（1996）：きょうだい関係と性格－4.SPI検査による検討－　北海道女子短期大学紀要32号

金子千栄子（1998）：大学生の孤独感に関する研究―孤独感とアサーション，幼少期の幸福感，両親の養育態度との関連性について―　札幌学院大学　学生相談研究Vol.19 No.2

遠藤辰雄（1992）：セルフエスティーム研究の視座　遠藤辰雄・井上祥治・蘭千寿（編）セルフエスティームの心理学　－自己価値の探求－　ナカニシヤ出版

Rosenber,M.：（1965）Society and the adolescent self-image.Prinston Univ.Press

工藤力・西川正之（1989）：孤独感に関する研究(1)　―孤独感尺度の信頼性・妥当性―　実験社会心理学研究，22 pp.99-108

Russei,D. Peplau,L.A.&Cutrona,C.E.（1980）：The revised UCLA Loneliness Scale:Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, pp472-480.

Peplau,L.A.&Perlman,D（1979）：Blueprint for a social psychological theory of loneliness. In M.Cook&G.Wilson（Eds.),Love and Attraction. Oxford, England:Pergamon Press.

岡崎有理子・杉井順子（2004）：青年期のきょうだい関係が社会的スキルおよび自尊感情に与える影響 －最も身近に感じるきょうだいとのダイアドな関係性を分析単位として－　奈良教育大学紀要　第53巻　第１号（人文・社会）

依田明（1990）：きょうだい関係の研究　大日本

図書
藤本修（2009）：きょうだいメンタルヘルスの観点から分析する　ナカニシヤ出版
松原ゆう・平松清志（2004）：子どもの現代的性格特性 ―きょうだい関係と親の養育態度の観点から―　CCI年報 17,pp.58－63
本郷一夫（1997）：ひとりっ子の友達関係 ―きょうだいの存在と親の養育態度はどのように影響するか―　児童心理51（5),pp5.37-541
千石保（1985）：現代若者論 ―ポスト・モラトリアムへの模索―　弘文堂
落合良行（1985）：青年期における孤独感を中心にした生活感情の関連構造　Jap.j. of Educ. Psychol, VOL. XXXIII, No.1
稲葉珠樹・戸田須恵子（1999）：中学生の自己概念と母親の養育態度との関係について　釧路論集31
堤政雄（1994）：むなしさ―青年期の実的空虚感に関する発達的―研究　心理社会学研究　第10巻第2号　pp.95－103
梶田叡一（1980）：自己意識の心理学　東京大学出版会
高塚雄介（2002）：ひきこもる心理・とじこもる理由　学陽書房
岡田努（1993）：現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察　性格心理学研究10,pp.69－84
Levy,D.M.（1936）：Hostility patterns in sibling rivalry experiments. *American Journal of Orthopsychiatry,* 6, pp183－257
山本恭子（2004）：青年期における自尊感情についての一考察－思春期の友人関係との関連－臨床教育心理学研究　Vol.30 No.1
Hall,G.S (1907)：Aspects of child life and education. *Boston Ginn*

以下の付表は，白差俊憲（2004）「きょうだい関係とその関連領域の文献集成 Ⅱ.論述紹介編」ｐ24の出生順位別にみた人格・行動の特徴・傾向から引用したものである。

付表１　長子（第一子）の人格・行動の特徴や傾向の語句

指導的・責任感が強い・几帳面・仕事が丁寧・言語能力に優れる・学業成績がよい・素直・控えめ・慎重・自制的・保守的・親切・おおらか・おっとりしている・大人びている・ませている・依頼心が強い・気が弱い・要領が悪い・ストレスに弱い・面倒なことを嫌う・甘ったれ・根性がない・やきもちやき・わがまま・神経質・内向性・嫉妬心・優越感・支配性・臆病・苦労性

付表２　中間子の人格・行動の特徴や傾向の語句

活発・適応能力・実行力がある・社会性，社交性がある・自己主張が強い・ひがみを持ちやすい・ひねくれやすい・気性が激しい・負けん気が強い・欲求不満が強い・反抗的な態度に出やすい・乱暴な行動に走りやすい・問題行動を起こしやすい・引っ込み思案・感情表現に乏しい

付表３　末っ子の人格・行動の特徴や傾向

明るい・快活・社交的・活動的・支配性，優越感を示す・甘ったれ・自己中心的・依存的・独立心，自立心に欠ける・引っ込み思案・内向的・神経質・内弁慶・わがまま・怠惰・泣き虫・意気地なし・ませている・忍耐力がない・利己的・友達が少ない

付表４　ひとりっこの人格・行動の特徴や傾向の語句

明るい・素直・知的能力が優れている・礼儀が正しい・おおらか・のんびりしている・意地悪でない・神経がこまやか・自己中心的・利己的・社会性・社交性・協調性がない・体が弱い甘ったれ・依存心，依頼心が強い・独立心に欠ける・忍耐力がない・意志が弱い・わがまま・気位が高い・おませ・嫉妬心が強い・神経質・情緒不安定

大学生の意識に関する調査

この調査は大学生の意識に関して調べようとするものです。

結果は統計的に処理し、あなた一人の回答のみを問題にしたり、公表することはありません。

京都学園大学人間文化学部人間関係学科久保ゼミ所属
近藤綾香

以下の項目に答えてください。

何人きょうだいですか？（　　）

あなたは何番目ですか？（　　）

次の特徴のおのおのについて、あなた自身にどの程度あてはまるかをお答え下さい。他からどう見られているのではなく、あなたが、あなた自身をどのように思っているのかを、ありのままにお答えください。

選択肢
1.あてはまらない
2.ややあてはまらない
3.どちらともいえない
4.ややあてはまる
5.あてはまる

1. 少なくとも人並には、価値のある人間である。
（1　2　3　4　5　）
2. 色々な良い素質を持っている
（1　2　3　4　5　）
3. 敗北者だと思うことがよくある
（1　2　3　4　5　）
4. 物事を人並みには、うまくやれる
（1　2　3　4　5　）
5. 自分には、自慢できるところがあまりない
（1　2　3　4　5　）
6. 自分に対して肯定的である
（1　2　3　4　5　）
7. だいたいにおいて、自分に満足している
（1　2　3　4　5　）
8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい
（1　2　3　4　5　）
9. 自分は全くだめな人間だと思うことがある
（1　2　3　4　5　）
10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う
（1　2　3　4　5　）

以下の項目について，あなたの普段の行動かを考え，「決して感じない」「めったに感じない」「時々感じる」「しばしば感じる」の４つのうち，一番当てはま所に〇印をつけて下さい。

選択肢
１.決して感じない
２.めったに感じない
３.時々感じる
４.しばしば感じる

１.私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている

（１　２　３　４　）

２.私は人とのつきあいがない

（１　２　３　４　）

３.私には頼りにできる人がだれもいない

（１　２　３　４　）

４.私はひとりぼっちではない

（１　２　３　４　）

５.私は親しい友だちの気心がわかる

（１　２　３　４　）

６.私は自分の周囲の人たちと共通点が多い

（１　２　３　４　）

７.私は今、誰とでも親しくしてない

（１　２　３　４　）

８.私の興味や考えは、私の周囲の人たちとはちがう

（１　２　３　４　）

９.私は外出好きの人間である

（１　２　３　４　）

１０.私には親密感のもてる人たちがいる

（１　２　３　４　）

１１.私は疎外されている

（１　２　３　４　）

選択肢
1.決して感じない
2.めったに感じない
3.時々感じる
4.しばしば感じる

１２.私の社会的なつながりはうわべだけのものである
（1　2　3　4　）
１３.私をよく知っている人はだれもいない
（1　2　3　4　）
１４.私はほかの人たちから孤立している
（1　2　3　4　）
１５.私はその気になれば、人とつきあうことができる
（1　2　3　4　）

１６.私を本当に理解している人たちがいる
（1　2　3　4　）
１７.私は大変引っ込み思案なのでみじめである
（1　2　3　4　）
１８.私には知人がいるが、気心の知れた人はいない
（1　2　3　4　）
１９.私には話し合える人たちがいる
（1　2　3　4　）
２０.私には頼れる人たちがいる
（1　2　3　4　）

ご協力ありがとうございました。